



「たんぼにまつわる話」 36.

「水と生きもの」

岡山市 十川 巡一

ため池や用水・谷川などは、たんぼにはなくてはならない存在です。

岡山市玉柏や原など平野部にあるたんぼは、旭川から取り入れている用水から水車を使って、水を入れていました。私は小学1年生の時まで、岡山市玉柏の平瀬という所に住んでいました。やはり用水のすぐ傍なので、ギーギーと水車の廻る音がよく聞こえていました（昔は沢山の水車が廻っていた）。用水より低いたんぼには用水から直接水が入っていました。

昭和28年頃、たんぼに水が入ると、多くのフナ・コイ・ナマズ・アユモドキなどが産卵の為、用水から流れ込んでいるみぞからたんぼに入ってきていました。しばらくするとオタマジャクシにヒゲが生えたような小さなナマズや2cmぐらいのフナやコイの姿を見るようになります。その頃のフナをタブナと呼んで、よく捕りに行きました。

昭和30年頃、岡山市牟佐大久保の山の中にあるたんぼは田植えの時、谷川から水を取り入れ、低めのところにあるたんぼはため池から取り入れていました。

大久保の祖父は玉柏のたんぼで小さな魚（たんぼで捕った幼魚）を沢山捕って、よく水で洗い、砂糖醤油でコトコト炊いて佃煮にしていました。しかし、はらわたを出さず作るので時々「ジャリッ」と砂を噛む音がしましたが、口の中で舌先を使い砂を上手に除けて吐き出して食べました《祖父はアユやハエ（オイカワ）の頭や骨を残すと「コラ！もったいない食べ方をすな」と怒りました。おかげで魚の骨や頭を食べるようになりました》。

大久保では斜面にたんぼがあるため、ほとんどのたんぼが、ため池に頼っていました。ため池の下には1反を頭に10段のたんぼがありました。その為、池の土

手を祖父がいつも草を刈り、木が生えないよう手入れをしていました。おかげでうちの池はいつも水が一杯でした（よく釣りをした池の一つです）。

しかし祖父が亡くなり、池のまわりを手入れする人がいません。やがてススキが生え、メダケが繁り、コナラ・アベマキ・ノグルミなどが生えて、20年を過ぎると（昭和58年頃）、木の根をつたって水が漏れるようになり、とうとう水がたまらなくなりました。もう、ため池としての役にはたちません。今では池の底の方に水があるだけで、まわりは木々がかなり繁っています。しかしトンボには良い棲み場所なのでしょうね、現在でも色々なトンボが見られます。昔に比べると、種類はあまり変わりませんが数が減りました。

ため池に水がたまらなくなったので、ポンプを使って旭川から水を吸い上げて、たんぼに入れていました（昭和58年頃）。

たんぼも殆ど人手に渡ってしまいました。しかし、今でも時々大久保に行き、里山で自然を満喫しています。5月下旬、たんぼの傍の竹藪から私を招くようにマダケのタケノコが覗いていました。もちろん採って帰りました（とても美味しかった！）。

大久保のたんぼに行ったとき（平成9年6月頃）、テングチョウ（新成虫）がたんぼの土の上にはいました。それも百匹以上という数です。逃げる気配すらありません。よく見ると長い口を土の中に突き刺しているではありませんか！土は2～3日前の雨でタツプリと水を含んでいたのものでテングチョウは水分を捕っていたのです。旭川の水辺で数匹のカラスアゲハが水を吸っているのを見たことはありますが、たんぼで見たのは初めてでした。テングチョウなど蝶にとっても、たんぼはなくてはならない場所なのですね。



たんぼの傍の小川で捕まえた3cm前後のタブナと呼ばれるフナ
(平成17年7月)



たんぼの土に口吻をさし込み水を吸っているテングチョウ
(平成9年7月)